

## 第7回

武蔵野市教育基本計画（仮称）策定委員会

武蔵野市教育委員会

第7回武蔵野市教育基本計画（仮称）策定委員会

○平成21年7月29日（水曜日）

○出席委員

葉養委員長 小島副委員長 小山田委員 本郷委員 原委員 田中委員  
磯川委員 萱場委員

○事務局出席者

山上教育長 秋山教育企画課長 鈴木指導課長 石代統括指導主事  
大平教育支援課長 平岡給食課長 隅田指導主事

○日程

1 開会

2 議事

(1) 中間まとめについて

① 中間報告骨子（案）の検討

② 武蔵野市が目指す子どもの育成について

3 その他

午後 6時58分開会

○秋山教育企画課長 皆さん、こんばんは。少し時間が早いようですが、これから第7回になります教育基本計画（仮称）の策定委員会を始めたいと思います。暑い中、どうもありがとうございます。

まず、きょう松澤委員と、それから安藤委員が当初欠席というご報告がありまして、また井原委員のほうは、急遽、先ほどちょっと仕事が長引くということでとりあえず欠席、間に合えば出席ということでございましたので、きょうはこの人数で始めたいと思います。

資料の確認をさせていただきます。

資料1から3に関しては、既に郵送でお送りしていますけれども、皆さん、きょうお持ちでいらっしゃるでしょうか。それと資料4ということで、武蔵野市がめざす子どもの姿というのを1つ追加させていただきました。これは武蔵野市が目指す子どもの育成ということで、今後使わせていただきたいと思います。

それと9月以降の日程に関して、日程案を机の上に置かせていただきました。もしきょうじゅうにわかるようであれば記載いただいて、帰りに事務局のほうに出してください。きょう無理な方は明日あるいは来週初めまでにこちらのほうにファクス等で連絡をいただければと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、委員長、よろしくお願いいたします。

○葉養委員長 こんにちは。それでは、7回目になりますけれども、会議を始めさせていただきます。

本日から、中間まとめの骨子（案）の検討ということで、いよいよ大詰めにまいりまして、全体的なキャッチフレーズというか、柱をどうしていったらいいかというようなことも考え始める必要があります。

最初に中間まとめについてということで、骨子（案）とか幾つかの資料が配付されておりますので、これについて事務局からご説明いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○石代統括指導主事 こんにちは。それでは、事務局から説明をさせていただきます。

本日は、中間まとめの骨子（案）ということで提示をさせていただきました。

まず最初に、資料の2を見ていただきたいと思います。A3のものでございます。武蔵野市の教育基本計画の中間まとめの骨子（案）でございます。構成を図であらわしています。大きく分けると5つの部分からできております。ローマ数字を見ていただくと、1番にはじめにということで、計画策定の背景、これを記載していきます。それか

ら、2ですが、武蔵野市のこれまでの取組、それから3番目、武蔵野市の学校教育の現状、そして4番目、計画の基本的な考え方、ここで目指す子ども像の姿。それを受けて、特色なんかをゴシックの囲みの中を説明していきたいと思います。それで、最後に5番目ですが、施策の体系、この5つから構成されております。

続けて、内容についての簡単な概要を話をさせてもらってよろしいでしょうか。

○葉養委員長 はい、お願いします。

○石代統括指導主事 はい。それでは、続きまして資料の3をご覧ください。

1の「はじめに」です。先ほど言ったとおり、ここでの内容は計画策定の背景ということに記載しております。教育を取り巻く社会環境が大きく変化する中で、新たな教育改革の考え方が、平成18年の12月、60年ぶりに改正された教育基本法で示されました。その中に、第17条なんですが、各自治体が地域の実情に応じて今日的に求められる教育の目標や理念、あるいは実施する施策に関する基本的な計画を定めるよう努めなければならない、ということが規定されました。この法の趣旨を鑑み、また、本市では生涯学習部門は生涯学習計画（仮称）を現在策定中でもあることから、学校教育分野について、今回、武蔵野市の教育基本計画（仮称）を策定することとしております。その後、教育三法が改正されて、学習指導要領も平成20年3月に改定されたと、そのようなことをここに記載していきたいと思います。

次に、2番目の武蔵野市のこれまでの取組でございます。ここでは、これまで武蔵野市の学校教育について代表的な取組を記載したいと思います。そこに4点ほど挙げさせていただきます。

平成16年3月に武蔵野市の教育のあり方ということ提言しました武蔵野市学校教育のあり方検討委員会、そして2番目、確かな学力の向上のためにということで、現在も学習指導員や学習支援教室など、個に応じた指導を行っております。そのあたりをここに書いていこうと思っています。

それから、3番目、ファーストスクールでは得がたい自然体験や生活体験を補完して、豊かな感性や情操をはぐくむということで行われていますセカンドスクール、あるいはプレセカンドスクールの実施について、そして4番目に地域の教育力を生かした教育の実施ということでございます。この他にも数多くの取組があると思いますけれども、こんなものもというご意見がありましたら、後ほどご意見いただきたいと思います。

次に、3番目でございます。武蔵野市の学校教育の現状ということで、これまでの委員会でも委員の皆様にご協議をさせていただきました内容、あるいはこちらから出させていただきました資料等をここに載せてあります。箇条書きですけれども、児童や生徒につ

いての学力、それから豊かな心を育てる教育、そして体力や運動能力、そして学校や家庭、地域についての現状などもここで記載をしております。ここについても、箇条書きで項目別に出してありますので、内容についてのご意見をいただきたいと思っております。

そして、4番目に、この計画の基本的な考え方です。ここでは前回の策定委員会の後半の部分、委員の方々には幾つかご意見をいただきました。武蔵野市が目指す子どもの育成ということで、これ今、空欄になってはいますが、きょう後半部分では、この部分もご意見をいただきたいと思っております。資料4できょう新たに出させていただきます武蔵野市がめざす子どもの姿ということで、委員の皆様からのキーワード、そしてこちらからの思いも、この中に少し入れさせていただきましたので、この後、これについてのご意見をいただきたいと思っております。

そして、次に5番目の2になるんですけども、今後5年間で武蔵野市の進める特色ある教育活動ということです。本来ならば、目指す子ども像の姿をしっかり固めて、ここにくるのが順序でありますけれども、ここでは原案ということでお示しをさせていただいております。1つは、「学びの基盤づくり」、そして2つ目に「知的好奇心を活性化させる教育」、そして3番目に「地域と協働した教育活動の推進」ということで、この3つでございます。これについては、きょう初めてお出ししていますので、少し丁寧に説明したいと思っております。

1番目に挙げました「学びの基盤づくり」、これは策定委員の皆様のご意見もありましたが、質の高い学びを実現して、子どもたちが生きていくためのさまざまな力を身につけるためには、その基盤となる学ぶ姿勢だとか心構え、健康な体を確立していくことがまずは大前提だというようなご意見もいただきました。子どもたちのこの基盤というものを、子どもたちが将来社会人となっても必要とされるような総合的な力というふうに定義をさせてもらっています。

本市の子どもたちの現状なんですけれども、先ほどにも書かせていただいていたけれども、全国や都あるいは本市独自でやっている学力の状況調査など、あるいは質問紙などの調査においては、学力、そして心の部分でも、おおむね良好だというような結果が出ております。これはこれまでの学校教育あるいは家庭の教育においても、学ぶ姿勢だとか、あるいは規律やルールというような基礎・基本を大切にしっかりやってきた結果だというふうに判断しております。本市では、今後もこの土台というか、基盤づくりをしっかりさせていく、一層この中を充実させていくということから、この学びの基盤づくりということを第1の特色ということで挙げさせていただきました。

幾つか、では具体的にはというので、例えば今言われている言語活動や個に応じた指

導をきちんとさせるだとか、あるいは生活規律や授業規律、社会性をまず土台としてしっかり身につけていきたいと思います。

そして2番目に続いていくんですが、この学びの基盤を土台として、さらに子どもたちを高めていく。それには、子どもたちの知的好奇心を活性化させるということが重要であると考えました。子どもたちの学びには、興味、関心あるいは意欲というのが不可欠です。子どもたちの知的好奇心を刺激し、活性化し、主体的に学んで高い知性や豊かな感性を身につけさせようというふうに思っています。

そして、知的好奇心を活性化させるにはというふうに考えたんですけども、やはり1つには本物に触れさせる。現在行っているセカンドスクール等もその1つでありますし、音楽活動や演劇や音楽鑑賞教室などもこの1つだと考えております。

また、もう1つは、質の高い学びということで、知的好奇心が活性化されるのではないかとこのように考えました。そこに書いてあるもののような、サイエンスフェスティバルや子ども文芸賞などで、質の高い学びというものを実現していきたいと思っております。

机上での学びに加えて、自然体験や長期宿泊体験、あるいは専門家の持つ高い技術を目の当たりにして五感を活用し、また質の高い学びを実践するために、いろいろな専門性の高い人材を活用していきたいと思っております。

そして、最後に特色3ということで地域と協働した教育活動の推進ということでございます。武蔵野市は、これまでも保護者や地域の方々の協力を得て、いろいろな教育活動を展開してきました。地域全体で子どもたちを育てていくというような基盤はできていると思います。この点につきましては、策定委員会でも第3回ぐらいまで協議してきた内容です。武蔵野市としては、ぜひともこの市内の豊富な教育力を有効的、そして効果的に学校教育の中に入れることで、豊かな学びをつくっていききたいというふうに考えております。

この策定委員会でも意見が出ましたが、学校が大学や企業といった支援を円滑に受け入れられるようなコーディネーターの役割を持った仕組みづくりだとか、あるいはネットワークを構築していくとともに、現在ある開かれた学校づくり協議会、これを一層充実させて、地域と協働した教育活動を推進していきたいというような考えでございます。その後に、(1)、(2)という書かれたものの一例も示させていただいています。

それでは、最後になりますけれども、第5番目なんですけれども、施策の体系でございます。これは体系図を出しまして、前回までに基本方針ごとに説明をしてきましたものでございます。体系についてのものを今後1つ1つ説明を、このまとめの報告書でし

ていきたいと思っております。

ざっと早口でありましたけれども、中間のまとめの骨子というものについて説明させていただきました。

以上です。

○葉養委員長 資料4は。

○石代統括指導主事 ごめんなさい。ちょっと中で話をしたんですけれども、資料4につきましては、資料の3の4番、計画の基本的な考えの1番なんですけれども、武蔵野市が目指す子どもの育成というところで、前回もお話をしてもらいましたが、なかなか意見がまとまらなかったもので、今回、委員の皆様から出された発言等、キーワードから、このような子どもということで出させてもらっています。これについて、私はこう考えるとか、もっとこういったものもあるんじゃないかということ、あるいはこれに対してのご意見等も、この後、引き続きお伺いできたらと思いますので、よろしく願います。

以上でございます。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

7回目になりまして、今まで配られた資料も大分ふえてまいりまして、ざっと1回目から見ていくと少しずつおとなしくなっているんですね、何となくね。議論すると、どうしても出っ張ったところが、いろんな議論の中で平準化するというのはあるかもしれないけれども、それだけに何か方向がちょっと見えにくくなっているという点があるかと思います。

あと、武蔵野の教育というのは高い水準にはあるんですけれども、この長期計画、調整計画の22ページの参考図を見ると、満足度水準というのは平均より低いんですね、小・中学校教育の充実という箇所は。重要度は高いんですね。非常に重要だという意識が強いんですけども、満足度のほうを見ると平均値よりも低くなっているんですね。だから、課題がないとは言えないんだろうと思います。

そういう問題と絡めて少し、余りにもまとまり過ぎてしまうと、結局、特色が非常に見えにくくなっていくという点がございますので、そういう点もちょっとお含みおきいただきながら、質疑応答ということでまずお願いできればと思いますけれども。

資料の4まで説明ございました。この資料4までの箇所で、ちょっと疑問に思った箇所とか、わかりにくいのもう少し説明をとということがございましたら、まずお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。どの資料からでも結構でございます。

○原委員 事前に資料、中間報告骨子の案を送っていただいたので目を通したんですが、

ちょっと厳しいことを申し上げるかもしれないんですけども、3ページの今後5年間で武蔵野市が進める特色ある教育活動というふうに、プロットになっているわけですが、特色の1、2、3の具体的な中身を見ていくと、今後5年間というよりも過去5年間でやってきたことのような気がしてしょうがないんですが。

つまり、セカンドスクール、プレセカンド、音楽活動、過去5年間、もっと前からかもしれないんですけども、授業研究リーダー研修、サイエンスフェスティバル、子ども文芸賞、図書室サポーターと、ずっと見ていくと、これまですべてほとんどやってきたことなんですね。そういうことで、何か今後5年間というとらえ方をしたときに、そういうものが挙がっているのでもいいのかなということ、まず1つ感じました。

それから、2つ目なんですけど、この特色の2の知的好奇心を活性化させるというこの言葉の意味がよくわからないんですが。知的好奇心を活性化するというのは、どうすることなのかなという。好奇心を活性化させるという言葉が、果たしてこれつながるものなのかなということ、ちょっと私自身、私、国語科なんですけど、いま一つすとんと落ちない何か表現であったというのが率直なところでありました。

ちょっと言っていくといっぱいあるんですけども、例えば4ページの特色の2の(2)の質の高い学びの創造という中で、よくわからないんですが、質の高い学びの創造というプロットでありながら、例えばサイエンスフェスティバルであったり、子ども文芸賞であったり、直接的に学校の教育課程にかかわっている中身じゃないんですね、こういうものは。私は、質が高いものというのは、日常的なものの積み重ねであって、こういうイベントといいますか、花といいますか、そういうものじゃなくて、日々積み重ねてきた質の高いものの、私はそこから実ったものが大事なことじゃないかというふうに思うんですけども、そういうものであったり、あるいは質の高い学びの創造のところ、よくわからないのが、例えば授業研究リーダー研修会を充実させて、これ質の高い学びというのは子どものことをいうんであって、これは質の高い学びの創造という、むしろこれは指導のことなんじゃないのかなとか、ちょっと何かそういったところに、内容的にちょっとどうなのかなということ、率直に思ったわけでありました。

ちょっといただいて精査して読んでいませんが、読ませていただいたときの率直な感想であります。

以上であります。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

事務局のほうで何かコメントございましたらお願いしたいんですが。はい、どうぞ。

○鈴木指導課長 それでは、今、原委員からいただきました特色2のところ、挙げられて

います、今後5年間で武蔵野市が進める特色ある教育活動に挙げられているものは、これまでにやってきたものが中心であって、むしろ過去5年間ではないかというご指摘をいただきました。これまでの蓄積の上に今があるわけですので、ここに挙げられているものは、これまでの取り組みが中心に挙げられていますけれども、こういうことをベースにしながら、今後補完していくように新たな施策を私たちは考えていくというスタンスでおりますので、ぜひそういう観点から、むしろご意見をいただければということで、ここでは例示をさせていただいております。

かつ、最初のころの基本計画の体系の中に、幾つかちょっと拙速に出させていたものがあつたわけですが、その辺も十分検討しながら、これまで培ってきたものをベースに、さらに積み重ねていきたいという思いがありますので、ご覧になりながらご意見をいただければという思いでいます。

それから、2つ目の特色2のところ、質の高い学びということで今お話がありましたけれども、私どもが考えていますのは、やっぱり教育のコアの部分ということで、教員の育成、教員の力量を高めるということがございました。ですから、ここでは今、授業リーダー研修会ということをして1つの例として挙げさせていただいておりますけれども、教員の育成というのを1つ重要なポイントだと考えております。

また、あわせて体系を考えたときに、教育環境の整備という言葉も挙げさせていただいておりますけれども、そのような観点から、要するに学びの質を高めていくことに必要なコアの部分と周辺部分というんでしょうか、そのような観点で例示をさせていただいたつもりですが、今、サイエンスフェスティバルとか文芸賞とか、そのとき限りのものがというご指摘もありましたので、ぜひそういう観点からご意見をいただけたらというふうに思っております。

○石代統括指導主事 あともう1つ、知的好奇心の活性化ということで、よく使われるのは知的好奇心を刺激するだとか、くすぐるだとかね、いろんな使い方があると思いますが、ある意味では何をやるにしても、やっぱり意欲が大切なんだというところで、この知的好奇心というものを1つのキーワードとして挙げさせていただいたわけなんですけれども、子どもたちがいろいろな学びをするにおいて、やはりやらされるとか、そういったものではなく、自分からそういった好奇心を持って、知的な好奇心を持ってやっていくと、それを支援するような、活性化させるようなものをこちらで用意していくというような形で書かせていただいております。

○葉養委員長 どうぞ。

○小山田委員 原委員さんに似ているんですが、やはり基本的な考え方の目指す目標が見

えない中でこういう特色ある教育を進めたいと言われても、議論が進めにくい気がいたします。やはり目指すものがあって、それに対して例えば意欲とかチャレンジ精神とかをもっと子どもたちに身につけさせたいので、そのためには知的な好奇心が必要だみたいなことになれば、特色ある教育の存在に意義が見出せると思います。学びの基盤の一番大事なものは、ある意味では知的な好奇心じゃないかなというような気もするんですね。

それから、そこに示されている地域と協働したとか、先ほどのリーダー研修会というのは、そういう学びある子どもたちを育てるための、それを支える条件的なものがここに入っているんですね。目指す目標、そしてそのための特色ある教育といったそのへの議論を進めていくのも大切かと思えます。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

ご指摘のようなことを、私もちょっと考えておりました。結局、だからこの教育基本計画というのは何をミッションとするかというあたりが、ほかの自治体でも、こういう会議、3つ4つやっております、それと対比すると非常に狭くなっている感じがするんですね。指導過程とか教育内容とか、何かそこいら辺に非常に特化してつくろうとされていて。ただ、そういう領域は、学校の校長先生がそれぞれおられるわけで、そこで多分かなり専門的に詰めておられる箇所であるし、今までも相当蓄積があって、厚い蓄積があると思うんですね、この自治体は。

だから、むしろ何か条件整備計画みたいな側面、例えば教員の職能開発とか、そういう面が柱でどうして出てこないんだろうって、ちょっと打ち合わせあったときに私も、特色の中に何か先生関係がないんですね。原校長先生も、その点をちょっとおっしゃったんですけれども。先生の職能成長とか、専門性をどう高めるかとか、それは非常に大きな柱であって、そういうものを前進させようとする、多分、拠点がセンターとしてなぜないんだとか、そういうかなり大きな問題につながっていくんですけども、そういうのをだから打ち出すのが、この基本計画であって、何か教育指導のプロセスとか中身にかかわることに入り始めると、これは1年や2年では終わらないですね、恐らく学習指導要領もあるわけで。ですから、そこいら辺の何か教育基本計画というのは何ぞやというあたりもちょっと絡めながら、議論していただいたほうがいいのかなと思うんですね。

多分、今まで原校長先生とか小山田先生から出していただいた意見は、そういうことに絡んでいるんじゃないかなと思いますけれども、そういう点はいかがでしょうかね。委員さんのご意見をちょっと承りたいんですけれども。

どうぞ。

○田中委員 私も同じことを感じていました。例えば、いただいた資料3の2番目に、武蔵野市のこれまでの取組というところも、武蔵野市の教育が一体何を目指してきたのかという総括的なものの言い方ではなくて、あり方検討委員会を、報告書をつくりましたとか、プレセカンド、セカンドスクールをやってきたとか、地域の教育力を生かした教育の実施というふうに、ある意味では点になっている部分が述べられているんですね。そうではなくて、やっぱりそういったもの、武蔵野市は一貫してこういったことを求めてきましたよという、やっぱりその説明が足りないので、その後が、ではそれがどうなったのという話がなかなか見えてこないような気がしています。

だから、今、委員長さんが言われたとおり、どんどんどんどん狭いところへ全部話が出てきてしまっていて、最後は、では毎時間の授業は一体どうするのかという話にまで下手したらいってしまうというふうに思うんですね。むしろ向かなければいけない方向は、武蔵野市の教育行政がどういうふうな方向で何を目指していくのかという根幹がしっかり押さえられていないと、何かいろんな個別のものが出てきて、それぞれ皆さんがそのレベルで論争しても、これというふうなまとまりが多分なかなか出てこないんだろうというふうに思っています。

ですから、まずこれまで武蔵野市が目指してきたもの、そしてここで明らかに方向転換をしなければいけないようなことは当然あるわけで、ではこれから私たちがどうしていくのかという部分を、やっぱりしっかりここで議論をしないといけないのかな。やっぱりそれは具体的に言うと人、物、金というふうに言われますけれども、1つは教員をどう育てていくのか、あとはどういう教員の仕組みをつくっていくのか、もう1つは環境の問題ですよ。学校の施設もそうですし、教材にかかわるところもそうですし、そういったものを、もっと包括的なものの基本的な立て方をここで議論するのかご提案いただくのか、ちょっとそこはわかりませんが、それが今必要なのかなというふうに思っています。

○葉養委員長 どうもありがとうございます。

ほかに、いかがでしょうか。

はい、どうぞ。

○本郷委員 先ほども委員長がおっしゃったんですけれども、細かい部分まで本当に言うところやっぱり議論が熱くなってこないというのはそれで、私もなかなか細かい部分に関しては意見は言いにくいですね。何が、こう。例えば、今言われた活性化する教育の中の文言、これが入っていないとか、これは要らないんじゃないかって、そういうことは一切、逆に言えないんですよ、そこまでの評価をする立場じゃないと思っていますので。

今までの皆さんおっしゃったとおри思う部分は、この回でどの部分を武蔵野市として推進していくのか、何を言いたいのか、これからの教育、5年間、何をするのかといったときに、例えば学びの基盤づくりなんて、すべてが基盤づくりだと思うんですよ。さっきの教員の質を上げたいといった、それはもう基盤だと思うんですよ。その前にやっぱり、まずこういう子どもたちをつくりたいということを議論していただければ、一般的な内容を私も言えますので、もうちょっと易しい会議にいただければありがたいなと思うんですけども。お願いいたします。

○葉養委員長 ありがとうございます。もし事務局のほうで、何かコメントありましたら。

この件は全部否定する話ではなくて、ちょっと欠けているんじゃないかという多分議論だろうと思うんですよ。だから、普通、武蔵野市教育基本計画なんていうことからすれば、施設配置計画とか、そういうのが当然入ってくるんだけど、空間論が抜けているんですよ。施設をどうするかとか、あるいは学校間のネットワークをどうするかとか、縦の連携、横の連携なんて、中央教育審議会で審議会を始めていますけれども、そういう何か空間的な話が何もなくて、ただ長期計画、調整計画を見ると非常に魅力的な文言がたくさん計画として連ねられていて、教育計画になると何かそれがちまちました非常に小さな話になってしまっている。だから、そこら辺を少し、やっぱり橋渡しを考えていかないと、恐らくこの長期計画、調整計画の中の有機的な一部として位置づくんでしょうから。そうすると、余りにもこっちのほうの何か小さな教室の中の話みたいなことになってしまうと、こっちとの関係がやっぱり非常につきにくくなるということもあるのかなと。だから、そこら辺はちょっと……。

きょうは中間まとめの1回目、議論する1回目なのでちょうどいいと思うんですよ。こういう議論をまずきょうやるというのは、チャンスとしては、きっかけとしては非常にいいと思うんですよ。まず、きょうはそういうちょっと骨組みをどうするかというあたりのご意見を出していただいたほうがいいんじゃないかなと思うんですね。

○石代統括指導主事 ありがとうございます。実は、前回までに武蔵野市の基本計画の体系ということで、きょうちょっと出していないんですが、武蔵野市の教育の全体を網羅して出させていただいています。その中では、もちろん今ご意見いただきました教員の質を高めてきちんとした授業をしていくとか、あるいは施設設備の部分で環境を整備して行って、子どもたちの安全、安心の確立をしていくとか、そういったものも入っています。

ただ、今回、骨子（案）ということで、骨子を並べて行って、その中でも武蔵野市が今後特色としてやっていきたいものということで出させていただいた3つの観点であり

ましたので。もちろんその中に、今、本郷委員が言われましたように、教員の質を高め  
ていくのはこの部分じゃないかということであれば、もう本当にそのご意見、ごもっ  
ともですので、そこにきちんと入れ込んでいく、そういった形でつくり込んでいきたい  
と思っております。

○葉養委員長 事務局を追求するだけの会じゃございませんので、皆さんでつくる会です  
ので、ご自由にこれ以降は自説をちょっと披瀝していただくような形で議論を進めるの  
がいいかなと思うんですけれども。子ども像というあたりは多分、子ども像とか、全体  
的に武蔵野の教育というのは、一言でキャッチフレーズ的に言うと何という、そこら辺  
はかなりコアになる可能性があると思うんですね。構造を決めますから、全体の。長期  
計画の全体の構造がそれによって決まってしまう、方向づけられますので、そういう点  
はどうなんですかね。

何か副題のほうを例えば考えてみたら、今まで出てきた案なんかを見ると、協働と信  
頼で、協働と信頼の教育へとか、何かイメージ的にそういう感じですよ、今まで出て  
きたのは。信頼づくりというのが、学校評価とかいろんなものを入れながら出てきてい  
るし、学校、家庭、地域の協働というのかなり重要なキーワードになって出てきてい  
ますよね。だから、多分方向づけというか、大きく見ていく場合に、協働と信頼の教育  
へという方向性かなという感じはするんですけれども。

さて、メインテーマが、主題がどうなるだろうかと。それが多分重要なところで、例  
えば学びの基盤づくりを重視した学校へとか、学びの基盤を重視した学校づくりへとか、  
何かどういう形で構造を決めているか、多分主題の言い方によって構造が決まってい  
まうと思うんですよ、全体の。だから、そういうあたりも含めて、ちょっと子ども像とい  
う抽象的な話ですけれども、そういうことも含めてちょっとご意見いただければと思う  
んですけれども、全体をどういう理念で組み立てていったらいいかと。今まではこうだ  
ったということもあるけれども、これから先、5年間をどうするかという未来からの視  
点みたいなものもあっていいと思うんですよ。

磯川さんなんか、何かご意見など。

○磯川委員 正直申し上げて、どういうふうにしていったらいいのかなというので、ちょ  
っと今、私自身の頭の中を整理しているような段階なんですけれども。多分、今、武蔵  
野の教育部でやっておられることを、頭の中に置いておられることを絵にしたら、こん  
な形になっているんだろうなという気がするんですよ。確かにさっき原委員が指摘さ  
れた言葉の使い方だとか、その辺についてはいろいろあるとは思いますが。

議論の中でね、僕はちょっと1つ、まだ残念だなと思っているのは、学校、小学校な

り中学校の先生方がどういう問題認識でおられるのか、今の子どもたちをどういうふうに見ておられるのか、それで自分たちのできていることとできていないことというのをどういうふうに自己評価されているのか、その辺をもう少し教えていただけないかなという気はちょっとしているんですけども。

○葉養委員長 どうでしょうか。原校長先生、先生方の意識というか、どういうふうにみずからを自省しているか。やっぱり人間ですから、ここまではできるけれども、これから先まだ課題だなというのはだれしもあると思うんですけども、先生方の実態からしたら、どういうあたりに何か弱さというか、これから先、努力しなきゃいけないか。

○磯川委員 例えば、授業研究というものをやっておられるようですよ。何かありましたね。研究授業ですか。そういう部分の中で、要するに具体的な先生方の問題意識というのはどの辺にあるのかなというのが、ちょっと我々には余り見えないんですけどね。要するに、子どもたちが十分、普通のやり方ではなかなか余り授業に集中してこないの、それをいかに集中させるその方法論的な部分をやっておられるのか。それとも、ある部分、国なり、国が、文部省が示している指導方針の中で、どういう自分たちの教え方、教えることの中身は、ある部分、国なりが方向を示しているんでしょうけれども、その教え方のところの工夫をされているのか。その辺をもう少し、逆に言うと先生方が何で悩んでおられるかというのを聞かせてもらえれば、それこそ逆に地域とのつながり、地域で手助けできる部分があるのかないかみみたいな話につながっていくんじゃないかなという気がするんですけども。だから、学校の先生方がどういうところを悩んでおられるかというのが、もう1つ、今、これまでの会議の中で出てきていないと思うんですよ。

○原委員 もしかすると小学校と中学校とは違うかもしれませんが、研究授業とか授業研究についていえば、私のところは特にですけども、いわゆる学力調査の結果に基づいて本校の子どもたちの足りないところ、それを授業の中でどう補っていくかという。私のところでやっているのは、すべてそれです。正直言って、教科そのものの中身について深くやることは中学校はかなり難しい、評価が皆違いますので。ですから、むしろそういうところでやらないと、ほかの教科の教員がその授業を見てもわからないと。ですから、研究授業についていえば、中学校の場合にはそういった視点で、学力調査の結果あるいは子どもの日常の学習状況に基づいた子どもたちの課題を取り上げて、それをどういう指導方法で改善していくかと、そのために授業をどう変えていくかと、そういう視点でのものがほとんどなんです、中学校では。悩んでいるかどうかはよくわかりません。

○磯川委員 具体的にはどういう、例えば原先生の学校の場合だったら、どういう部分が弱点と見られるので、この辺を肉づけしていくとか、そういうこと。

○原委員 それはちょっと一言で言えないのは、学年によっても違いますから。同じ教科、国語であっても、1年生、2年生、3年生、それぞれ課題は違いますので。

○磯川委員 年々違うということですか。

○原委員 学年で違いますから。例えば、いわゆる国語でいう言語事項が非常に身につかないまま中学生になっているケースもありますし、あるいは書くことが非常に弱い学年もありますし、そういったところの、それを学力調査の結果に基づいて出てきているそういう課題を取り上げてやっているわけで、必ずしも3学年が全部同じ視点でやっているわけではありません。

ちょっと私は全教科のことを、学校へ戻ればその改善プランがあるので見ればわかりますが、今ちょっとここで全部それを申し上げることはできないんですけれども、原則的に今申し上げたように、それぞれの学年によって違いますので、それに応じた指導の改善を研究授業を通して、果たしてそれでよかったのかと、それがその改善に結びついた授業だったのかという視点でやっています。ですから、方法論に近づきますので、教科が違って研究協議をやればいろんな意見が出てくると、こういうことなんです。多分、小学校と中学校、ちょっと違うというふうには私は思っていますけれども。

○小山田委員 小学校、中学校では校内研究といって、毎年それを冊子にまとめて研究発表したりしているんですね。それがちょうど手元に8冊ぐらいあったので、ちょっとそれを見てみると、小学校では、先生方が自分の学校の実態を見て、その足りないところを校内で研究して、少しでも子どもたちにそれを身につけさせていこうという考えで校内研究を実施している場合もあります。その中では、例えば、教えられたことは学ぶんだけれども、それを生かす場面が不十分だとか、あと自分で判断して物事を決めていく辺がちょっと弱いとか、他に対する思いやりの心をもっとはぐくみたいといったことから、校内研究を進めている小学校もあります。また、中学校では基本的なルールだとか社会性とか、伝え合う力みたいなことをぜひはぐくみたいみたいということで校内研究に取り組んでいる学校もあります。

各学校の学校として何を今求めているかというようなことは校内研究紀要などを整理すればある程度見えてきそうな気がするんですけどね。

○原委員 あと、私のところの学校の例でいきますと、例えば私が学校経営方針、経営方針の中に新しい学習指導要領の先取りをして、やっぱり活用型の、要するに基礎・基本の知識・技能の習得を活用する、それを活用する授業を何とか展開しろということを経

営方針の中に上げているんですね。ですから、例えば学力調査の結果に基づいた研究授業をやっていますが、そういう中で経営方針のそういう視点も、その中に取り入れてほしいということをやっているんです。

つまり、あなるほど、活用型の授業ってこういうことなのかというのは、他教科でも見てわかるように、そうしなきゃ、例えば保護者の方に見てもらってもわからないわけです、当然。ですから、そういう意味では、学校経営方針の中に示しているものについても、取り入れたものとして研究授業をやっていると。それをだから、みんなも、すべての教科が違って研究授業を見るとき視点としては、どの教科の教員だっで見れると、そういうものを上げてやってはいるんですけれども。

やっぱり何が悩みかと言われたときに、そういったものをどうやって取り入れていくかというあたりは、かなりそれぞれの教科で教員たちは、悩みながら努力しているというふうには思いますけれども。

○葉養委員長 前に教員の年齢分布の資料が出て、ある意味でフタコブラクダなんですよ。真ん中のところが小さくなっていて、どこでも大体そうなんだけれども、受給関係で変動がありますので。だから、そういう意味でいうと、若手の先生をどうサポートするかという校内の体制整備とか、いろいろそういう課題は前にも出たことはあるんですけれども、それが何か文言で余り出てきていない、消えてしまったみたいな。

どうぞ。

○鈴木指導課長 磯川委員のほうから、現場でどんな問題を抱えているのか、またそれぞれの学校の中の課題をどう解決していくのかということでお話があったと思いますが、今、葉養委員長のほうから言われたように、若手の教員の中には、ふだんの授業がうまくいかないとか、児童・生徒をなかなか自分のほうにひきつけられないとか、そういう悩みをもっていて、どんなふうに授業をしたらいいのかというところから学びたいというケースもあるわけです。

ですから、そういう場合には、そういう年次に合った研修の中で指導法を学ぶとか、あるいは指導技術を学ぶような研修も実際には提供しているわけです。ああそうか、こうすればいいのかと気づき、自分の指導でやってみようとするわけです。または行政的な立場からいうと、新しい指導内容が入ったときにそれをどう扱っていいかわからない、あるいは指導法が未開発のときに、1つの例示として、こんな扱い方がありますと、実践事例として研修会等で紹介することもあります。また実践の研究開発という視点から研究授業というのを行ったケースもございます。

○磯川委員 そうすると、研究授業のねらいとしては、やっぱり教員そのもの、教員、先

生の力量を上げていくような、研修目的的な意味が大きいんですか。

○鈴木指導課長 あとはさっきのお話にあったような校内の課題を、全員で解決していくという二面性があるんだと思います。

○磯川委員 だから、逆に言うと研究授業をされる先生方というのは、どっちかという若い先生がやられるということですか。

○原委員 必ずしもそうではないです。

○磯川委員 そうでもないんですか。

○原委員 授業のことでもし言うのであれば、東京都は人事考課制度をやっている、管理職による授業観察を3回やるという。私は、年3回、50分丸々、全教員のを見ますけれども、見終わった後に授業のメモをしっかりと、書いたものをフィードバックして、それに基づいて力量を高めようという。事前にどういう点を見るよということも、きちんと明示しながらやっていますけれども。

○磯川委員 それは評価の場であるわけですね。

○原委員 評価の場でもありますが、評価だけじゃなくて、やっぱりそういうことを通して学校経営方針の中の学習指導に関するものの浸透を図ってみたり、小山田先生の授業観察に、私は到底、足元に及ばないんですが、でも一応、事前に示した観点から見てどうだったかと、その観点というのは大体学校経営方針の中に載っていることを取り上げているんですけれども。そうやって授業研究とか校内研修とかという場じゃなくても、そういうことで取り組んでいるということはあると思います。そんなにしょっちゅう研究授業はやってられないです。

○葉養委員長 先生の項目は、やっぱり1つの大きな柱なので、それはやっぱり立てたほうがいいかもしれないですよ。先生のケアとかメンタリングとか、そこら辺はかなり大きな課題なので、若手教員だけじゃなくて、やっぱり教員のストレスとか、三楽病院なんかも繁盛しているわけですよ。先生方の精神的な病に対応する病院が都内にあるんですけれども、非常にこう。だから、そういう学校の職場としての健康というか、そういう観点もやっぱり非常に重要な時代なので。

○本郷委員 それは僕も思っていました。むやみにこの場で何かやりましょうとか、こういう政策をしましょうといっても、今まで実質やってきたことがここに載ってきて、やってきているわけじゃないですか。さんざんこの場で出ましたセカンドスクールというのも、今までなかったものが学校に入ってきて、先生たちの苦労があって、今こうやってきた中で、できれば今後を今話し合っているわけじゃないですか。だけど、実際、今までの過去を振り返ったときにセカンドが、例えば今、たまたまセカンドが大きい話に

なっているので、セカンドを例に挙げてみて、先生たちがこれを目標にやってきて、今の現状のセカンドはどうだったのかというのは、ちょっと先生たちに聞きたいとは思っていますね。今達成されているのか、今発展途上なのかという部分です。

○葉養委員長　そういう点、田中先生とか原先生、いかがでしょうか。

○田中委員　達成されているかという点と難しい部分もあるんですけども、武蔵野市はちょうど10年たったときに意識調査を1回かけているんですね。また、それを見て、それぞれ学校によって自己が不十分な部分を改善したりとかしていますので、その当時の資料を見ると、まあ落第点はついていないだろうというふうに思っています。その後、当然改善をしているので、今はそれよりか当然向上しているだろうというふうに思いますけれども、やっぱり何年かに一度きちっと、子どもの意識調査だけがすべてではないですけれども、やっぱりあいつた点検は必要なんだろうというふうに思っています。

ここ何年間かの間に、各学校も実施地をかなり変えてきているんですね。変えてきているというのは、やっぱりそこで課題があるから、改善するとき、この実施地ではもう困難だろうと、むしろこの地域に移せば、当然今までここではできなかったものが、課題解決できるだろうというふうに思っているから変えるので、年ごとにセカンドスクールのよさというのは、当然成果は上がっていくだろうというふうには思っています。

ただ、具体的に今ここで、その数値として示してくれと言われると、今ちょっとそれも手元にないのであれですけども、私は武蔵野市の大きな特徴だし、それは非常に安定した形で今行われているというふうに思っています。

この間も文科省の委託研究授業を受けている武蔵野市の学校が幾つもあるわけですけども、その東京都会合があったんですね。出席している学校が9校ぐらいだったのかな、そのうち武蔵野が7校なんです。だから、それだけやっぱり武蔵野はよくやっているし、そこで話されている内容を聞いても、それからまた2年前に関東ブロックの研究協議会があって、そこにも私、聞きに行きましたけれども、そこで話されているレベルというのは、武蔵野市の10年前のレベルですね。武蔵野市がはるかにすばらしい中身をやっているかというのは、そういうところに行ってみると初めてよくわかる。武蔵野市にいて正直いって余りよくわからないんですけども、やっぱり10年以上培ってきた成果はあるだろうというふうに思っています。

ちょっと具体的にお話しできなくて申しわけありません。

○石代統括指導主事　なかなか数字的には出すのは難しいんですが、一応、教育委員会は幾つかのねらいに対して、例えば基本的に、そこで自然とかかわって豊かな情操だとか感性を高めることができたとか、あるいはいろんな目的を持って探究心が深められた

だとか、子どもたちのかかわり、あるいは向こうの人のかかわりはどうだったのかとか、いろいろな部分で数値的な評価を学校からも出していただいています。それに関しましては、4段階でつけているんですけれども、ほぼやっぱり3と4というか、非常に結果としては高い評価がついてくる。

なお、いろいろな部分がありまして、課題があったところに関しましては、次年度、なぜこうなったのかというのをもう1回、事務局と学校で話をしまして、その後、どういうふうに改善していくかというのまでやっています。平成7年、8年から小・中全体でやっていますけれども、ある意味ではそういったものを通して、そこにも、ここにも質的向上というふうに、充実というふうに書かせていただきましたけれども、さらにいいものにしていきたいという考えは事務局でもございます。

○原委員 基本的なとらえ方は、私も田中先生と同じなんですけど、10年やってきても毎年子どもが違うんですね。例えばプロ野球のあるチームみたいに、10年間同じ選手で育成してくると、学生野球みたいに、高校だったら毎年3分の1のメンバーが変わっていくのと多分違うんじゃないかと思うんですが。ですから、年度によっても違います。どれだけの成果がというのは違うと思いますし、同じことをやっても、同じメニューのセカンドスクールをやっているけど、うんと効果が上がる時もあるし、そうでもない時もある。これは正直なところだと私は思う。それは同じ子が毎年毎年、同じような体験を積んでくれば、多分莫大な効果が上がるんだと思うんですけれども、いや子どもたちにとっては初めての体験だ、常に子どもたちは初めてのだというところの難しさはあるんだらうなというふうに。

それから、もう1つ、他の区や市から武蔵野に異動してきた教員が、セカンドスクールに行く前は、初めて行く前は、何となく嫌な思いを持って行きます。でも、終わって戻ってくると、来年も行きたいなって言っています。ですから、やっぱり確かに長い期間行っていますので、行く前は負担だと思う部分はあるんだらうというふうに思うんですが、多くの教員は帰ってきた後は来年も行きたいと言う、無理だよそれは、と私なんかは言うんですけれども。そういう思いを持って終わっているということは、教員のほうにも一定の満足感があるんだらうというふうに思っていますけれども。

○葉養委員長 どうもありがとうございます。

○磯川委員 だから、逆に言ったら、そのセカンドで何を指して、要するに非常に準備に時間をかけてやられるんだらうと思うんですよね。とにかく、でき上がっておるから、そののあれにぼっとのせればええわということじゃなくて、準備のところはかなり意味があるんだらうと思うんですけれども、セカンドで目指している部分というのが、言っ

てみたら武蔵野の教育の特徴だろうと思うんです。だから、そこを膨らますというのがやっぱりいいんじゃないかという、1つの手だてとしてはあるかなという気はしますよね。

○本郷委員 私も今そう思っています、結局、とてもすばらしい総合学習というか、凝縮した部分なので、今言ったとおり10年前の武蔵野市を見ているようだというご意見もありましたけれども、そうやって1校ずつ、設営側が何かをクリアして行って、10年分の蓄積がやっぱりありますので、そこからまた高みを目指して、こういう子どもたちになってほしいというのをを出していただいて、それで、あともう1個、ちょっと戻りますけれども、さっきの応用がきかないという部分で、それは僕が思うに、やっぱり心に残っていないと思うんですね、教育が。その場で怒られて終わり、その場で教えてもらって、テストで点とれたら終わり。心に残る教育を、ぜひともやってほしいというのがあるので。それと、あと今のセカンドの蓄積された部分で、もっと続けてほしい、今後こうなってほしい、こういう子どもたちになってほしいという部分があれば、これは1つのまとまりで、それが……

○磯川委員 逆に言ったら、その10年間やってこられて何が進化したんやと、その中で。セカンドで求めてきたことがというようなところを見ていかれたら、やっぱり武蔵野の目指している教育の方向というのは、そこにもうあるんだろうね、多分。

○葉養委員長 それ、すごい重要な指摘だろうと思いますね。だから、かなりもう熟しているんですよ、この自治体におけるプログラムは。ただ、セカンドスクールそのものは、ほかの自治体にとっては目からうろこが落ちるようなプログラムで、中央区が数年前に武蔵野のセカンドスクール構想をモデルにして取り組みを始めたんです。あそこは柏学園というのが柏にありまして、そこに子どもたちを連れて行って、武蔵野と同じ形を導入しようとした。最初は3泊4日で考えていたんですけども、教育委員会は。先生方がそれは長過ぎるといって、結局、反対が起こって2泊3日にしたんですけども、それでも学務課長のお話を伺うと、送り出すときの子どもの表情と、柏学園から帰ってきたときの子どもの表情を比べると全然違うと言うんですね。急に何か大人になったような表情をして子どもたちが帰ってきたと。学務課長、非常に感激して、女性の学務課長さん、よく子どもを見ているんですけども、非常に効果があるというので、それは不登校とかそういう、あるいはドメスティック・バイオレンスとか、そういう子どもを収容しているNPOなんかがあるんですけども、私の知っている人で、長野県の上田市でそういう施設を持っている人がいるんですけども、今一番大きな課題というのは、母子分離にあるということをおお体言うんですよね、そういう施設を持っている人は。つま

り、一人っ子家庭が多いものですから、密着し過ぎてしまっているんですね。特にお母さんと子どもが密着し過ぎていると。だから、その密着し過ぎているやつをどうやって解きほぐすかという、それが非常にああいう施設に、理事長さんですけれども、いると、非常に大きな課題で、大体そういう言い方をされるんですよ。しかも、量がふえているんですよ。もう個人では対応ができないぐらい。お断りせざるを得ないと、ベッドがあるものですから。子どもを家庭から引き離して寝泊まりさせるという施設なものだから、ベッドの個数があるので、ともかく公的な何か取り組みがないと、個人のNPO、1つの試みでは限界だという。

だから、そういう何かケアとかメンタリングというのは、教員の世界でもそうなんだけれども、コミュニティそのものも、近隣関係とかコミュニティ、この武蔵野市におけるコミュニティが、果たしてケアとかメンタリングという面で十分機能しているかどうか。全体的な日本の状況からしたら、やはり個別化が進行していて、家庭の中でも家庭内離婚と言われてたりとか、そういう言葉がはやっていて、個室をみんな持っていて、生活パターンが違うものだから、一度も会わないである家庭が過ぎたと。みんな個室を持っていて、お母さんも職場があって、自分の部屋があってという、寝る時間も帰ってくる時間もみんなばらばらなので。そういうことも言われるほど、何かやっぱり人間関係の基本的な部分というのがいろんな面で課題を抱えていると。

その中で、子育てストレスとか、どうしても子育てって女性にかかるというのがデータの的には出ているんですけれども、男女同権といっても、お母さんにどうしても子育ての負担というのかかっているというのはデータの的には出ていますよね。だから、それで育児がつらくて逃げ出したいと思うことがあるなんていうパーセンテージが、やっぱり調査すると高まっているんですよ。年を追うごとに高まっているんですよ。70%ぐらいだったと思うんですけれども、いろんな調査があるんですけれども。

だから、家庭の問題というのか、何か学校教育の中にだけ閉じこもっているから余り出てこないだけけれども、だけど学校教育の問題というのか、家庭教育の問題というのか、家庭における子どもの育ち方の問題というのか、そこはかなり大きな根っこがあって、そこに何かいろいろ行政がやることには限界があると、難しさがあるというのはわかるんだけど、でも福祉と連携しながら何かできることはないかというような、親の何か問題というのかは扱えないのかどうかですね。

教育基本計画の中、教育基本計画だけじゃないと思うんですけれども、福祉とか、あるいは医療とか、そっちのむしろ領域としては大きいのもかもしれないけれども、教育の領域で学校教育をメインに設定していったときに、でも幼稚園だって学校教育の中に入

るわけですね。1つありますよね、幼稚園が、公立幼稚園があると。それで、幼稚園は今度は無償なんていうマニフェスト、自民党から出ていたりとか、幼児教育領域とか、あるいは家庭における育児とかしつけの問題とか何か、そういう問題をベースにして学校に子どもたちはやって来るわけで、何か教育の領域でできることはやっぱりきちんと入れておいたほうが良いような気がするんですけども、先生方はいかがでしょう、こういう問題は。親の問題とか、地域の問題とか、そこいら辺の……。

どうぞ。

○鈴木指導課長 委員長のお話にあるように、子育ての問題とか福祉の問題が、やっぱり学校における児童・生徒の基盤にあるわけですから、そのあたりで今回の特色あるという中で、学びの基盤づくりみたいな中で、そういうところをイメージしたわけですが、実際には施策としてはなかなか学校教育の中でかかわってくる場所は、本当に領域的には少ないんですね。ですから、そのあたりで、例えば話を聞く基本的な姿勢ということで言語活動の中でとか、あるいは生活の技術をつけるということで基礎・基本というあたりで、あるいは基本的な生活習慣とか、そんなところから学校でできること、学校教育の中でできることということをイメージしてきたんですけども、今まさに委員長が言われるように、子どもを支える基盤部分ですよ。それは学校の中だけではなくて、いろんなかかわりがあると思うんですが、そのあたりで学校教育を通してできることは何かというあたりも、ひとつご意見をいただけたらというふうに思うところです。とっても大事な観点だと、私どもも思っているところでございます。

○葉養委員長 どうでしょうか。P T Aレベルの取組だといろいろ、恐らく武蔵野市の学校でもあるんじゃないかと思うんですよ。ほかの自治体でもかなりそういうのがあるし……

○磯川委員 セカンドスクールって、皆さんから一言で言ったら何ですか、セカンドスクールで目指すもの。

○鈴木指導課長 積極的、主体的に、ものにかかわっていく力の育成……

○磯川委員 主体的にかかわる力を養成するということですか。

○鈴木指導課長 それが人間関係であったり、自然であったり、物であったり、1つのポイントがあると思っています。私はそう思っています。

○磯川委員 要するに自分が何かに対して、それが自然であったり、友達であったり、そういうものに対して、自分で働きかけていくということを自分で学ぶということですか。

○鈴木指導課長 そうですね。かかわりを通して学ぶということですよ。

○原委員 私は当時、教育委員会にいたんですが、私は一言で言えば何かといたら、武

蔵野市ではできない体験をすることというふうに思っています。

○磯川委員 蔵野でしか……

○原委員 蔵野市ではできない体験をすることというふうに私は思っています。

○磯川委員 蔵野市ではというのは、要するに非日常なんですね。

○原委員 蔵野市ではできない体験をセカンドスクールでしようということが、そもそもセカンドスクールを蔵野が始めたきっかけだというふうにとらえています。ですから、私の学校ではそういったものを5日間、メニューの中に取り組んでやろうとはしています。

○田中委員 私は原体験だと思っています。例えば、どういうことかということ、自然ってすばらしいですよって言葉では言いますよね。でも、眼下に本当に雲が流れる風景って見ないわけですよ。それから、暑い夏を越しても雪が残っている山があるんだって、耳で聞いていてもしょうがないんですよ。実際見に行くと、万年雪が残っているわけですよ。

それから、命の大切さにしても、ふだんマス釣って塩焼きにして食べたりするんだけれども、マス釣ってしばらくすれば死んでしまっても余り命という感じはしないんです。ところが、私たちの学校では、サケをつかみ取りをします。サケって10キロもありますから、ものすごい躍動感があるわけです。自分で押さえ込めないわけですから。本当に生きていると思うわけですよ。それを地元の人に棒を渡されて、要するに殺しなさいと言われるわけですよ。かわいそうですから、こつんとやるわけですよ。そうすると現地の人に、それは一番残酷な方法、一撃でと言われるわけですよ。それをお昼に食べるわけですよ、自分が殺した、たたいたサケを。それは命というものに初めて触れる場面なのです。よくテレビで豚だとか鶏をちょっと調理しますよみたいなものがあるんだけれども、確かにそれはそれですばらしい実践なんだろうけれども、一気にそこまでやっぱりなかなかいけないですよ。ですから、ちょうど小学生には、私はそれが一番合っているだろうというふうに思います。

それと、一番私が、私自身が感動させられたのは、山形県というのは、日本にある即身仏の半分以上が山形県なんですね。ガラス1枚向こうに仏様がいるわけですよ。けさを着て、座禅を組んだままの。100年前には生きていた方なわけですよ。その人が、なぜそういう生きざまをしたのかという、お寺さんから聞くわけですね。つまり衆生の要するに平等、それから衆生の人たちが幸せになるようにということで、みずから命を絶っていく。命を絶つのも、これはミイラじゃないんですよ。ミイラというのは、死んだ後、防腐処理をするものであって、即身仏というのは生きている間に腐らない体を

つくっていく。初めに五穀を絶って、次に豆類を絶って、最後に漆を飲んで、そして腐らない体をつくって、穴の中で念仏を唱えて即身仏になっていくという、そのすさまじい生き方。子どもたちは、ガラスの向こう側にそれがあると、気持ち悪いという反応がくるかなというふうに私は思っていたんですね。ですから、子どもたちをそこに連れていくときには、ちょっと冒険だなというふうに初めて思いましたけれども、行ってきた子どもたちが、そういうことではなくて、その生き方に感動して帰ってきたというのがやっぱり、私は子どもたちに感動しましたけれども、子どもたちはその仏様に感動した。こういう原体験、何か戻ってきたときに、ああそうだったよなって思い出せる、そういう原体験を培うのが、私はセカンドスクールだろうというふうに思っています。

○磯川委員 まさに日常では体験できないこと……

○原委員 だから、言い方を変えればそういうことですね。つまり、ファーストスクールで学ぶことができない、それをセカンドスクールでやろうということだと思えます。

○磯川委員 その企画というのは、それぞれ学校ごとにやるんですか。

○田中委員 そうです。

○磯川委員 学校ごとに。

○田中委員 はい。

○葉養委員長 田中校長先生がおっしゃるのは、私、田舎育ちなものだからすごくわかって、千葉県房総半島の海沿いなんですよ。岩井という海水浴場のある町で、武蔵野もたしか海の家があるんじゃないかな、武蔵野市。東京の23区、ほとんどあるんです。一番驚いたのが、イナゴを東京から来る人は食べる。イナゴは友達だったから、だから友達を何で食べるんだろうと。だから、今でも食べられないですね、何か記憶が。

話違うんですけども、この武蔵野の市域の中に、登って飛びおることができるような、木登りして飛びおることができるような木ってあるんですか。あるいはそういう木があったとしても、そういう遊びというのができるような場所ってあるんですか。木登りして……

○原委員 今、私の六中の隣にプレーパークというのができて……

○葉養委員長 プレーパークができた。

○原委員 それに近いことはやっています。木登りだけじゃないですけども。

○葉養委員長 何かやっぱり人間でもともと動物なので、だけど動物的なものを失っていつているという話は幾らもありますよね。だから、転ぼうと思うと、危ないといって親が結局転ぶのを妨げてしまうから、受け身の体験というのが小さいころにできないとか、それで骨折してしまうとか、何かそういう、あるいは小学校で子ども同士がぶつか

ったら、肩と肩がぶつかったら骨折したとか、何か漫画みたいな話が現実起こったりしているという。だから、木登りしなかったら、飛びおりと、安全な状態で飛びおるという経験が得られないですね。だから、そういうものを、このセカンドスクールというのがどこまでメニューを持っているかわからないですけども、きちんと学力構造の中に位置づけていけば、非常にすばらしい取組として、さらに発展するかなと思います。

ほかにはいかがでしょうか。

○小山田委員 では、セカンドについて。

セカンドは、この地にいれば当たり前のように思える教育活動ですけども、他の地域から見たらすごい教育活動だと思います。ですから、武蔵野はそんなに新たにあれだこれだと言わないで、むしろセカンドの充実、発展というんでしょうかね、そこは大きな施策であるということを考えております。

セカンドの定義は、一言ではなかなか言えないんですけども、やっぱり家族と離れて自分で生きるということがあると思うんです。だから、自分のことは自分でやらなきゃいけないということと、同じ部屋で泊まる人間、他人と一緒に生きなきゃいけない。そこでいさかいがあり、助け合いがある。そこに立ち合う指導員側が、いさかいがあった場合、ここはチャンスだぞという目で見るとか、やめろと言ってしまおうか、その辺を意識してその子どもたちにかかわることによって、それを乗り越えて、それが自信につながっていくというような、意義があると思うんですね。今、各種答申などで、いろいろなことで子どもたちが自分に自信がなくなってきていて、自分の将来だとか人間関係がうまくいかない、不安定になっているみたいなことが起きているといった指摘がされていますが、まさにセカンドは、そういうことのチャンスになるというようなことから考えていくと、さまざまな意味でこのセカンドには大きな意義があるということを感じているので、ここはぜひ武蔵野の重要な施策にしてほしいなと改めて思います。

○石代統括指導主事 ありがとうございます。セカンドというのは、ちょっと戻りますけれども、この特色の中では、知的好奇心を活性化させる部分の本物に触れると、すべてがやっぱりファーストでは得られない場所で、本物に触れて、そこで子どもたちがいろいろな力を身につけていくというところだと思います。

その前に、原先生にいただいた学校と、あるいは家庭がどうやって足並みそろえていくか、そこにどうやって教育委員会もかかわっていけるか、そこは本当にベースの部分で基盤づくりだと思います。そういったものを1つ1つ積み重ねていって、3つ目に地域との協働なんていうのもあるんですけども、そういった流れで、今、武蔵野の特色

というものをここであらわして行って、いいのだろうか、あるいはほかのもっとこんなものがあるよというようなものを、もう時間がどんどん過ぎてきているんですけども、ご意見いただけたらなと思いますので、よろしくお願いします。

- 葉養委員長 小平四小でPTAのお母さん方が、親としての自分をチェックできるサブノートみたいのをつくったんですね。教育委員会は、だからお金の面で支援したと。それを東京都の生涯学習審議会の副会長をやっていたときに、小平市の教育長さんが、うちのPTAのお母さんたちはこんなのをつくったんですよと言って皆さんに配ったんです。それはものすごいよくできていて、自分で何点と点数をつけられるようになってるんですよ。何か委員さんからちょっと出たのが、子どもが採点する箇所も入れたらもっとよかったのにねとか、お母さんを子どもが採点するという。だから、あれはお母さん方がつくっているわけだから、教育委員会はお金を出すだけですから、だからそういう何かかわりもあるんじゃないかと思うんですけども。武蔵野の小学校なんかで、そういうのはないんですか。やっているような。お母さん方が、何か親としての自分を自分たちで見詰めましょうというようなことで何かこう。
- 田中委員 私のところは、強制的ではないですけども、年に5回ほど保護者を対象とした、昔でいうPTAがよく教養講座みたいなものをしていましたけれども、PTAがやるのではなくて学校がやる。学校がしてほしいこと、そのスペシャリストを呼んで、おいでいただいて、その話を保護者に聞いてもらうという企画を、私のところは年5回、5講座持つんですけども、その中の1つに去年は親子関係診断テストを入れて、お母さん自身が、ご自身が、自分がどういう親であるか、どういうことの距離感を持っているかというのを臨床心理士に指導してもらいながら検査をするというのはやりました。欲しい方は、子どもがやるやつもあるんですね。それは有料で、お金がかかることなので、それは前任校では希望者にはお配りをしましたけれども、今度の学校はちょっと大きいので、無料配布はちょっとできないので、ご紹介だけにとどめましたけれども、ただそれはすべての学校がやっているということでは決してないです。私のところは、そんなことをやっていますけれども。
- 葉養委員長 何か、だから教育という領域でもできることはあるんじゃないかなど。全部福祉領域ではなくて、福祉は福祉でまたメインストリートでいっぱいあるのかもしれない。教育の領域でも、やはり学校教育の一番の基盤かもしれないですね。それぞれの子どもの家庭における教育というか、子育て体制が整備されるというのは一番基盤かもしれないので、そこら辺もちょっと教育基本計画でどこまで書き込めるかというのはあるんですけども、でもこの長期計画なんかを見ると、子育て・教育の中に結構入

っているんですよね、そこいら辺の記述が。だから、所管とこれとは違うんだろうけれども、だから少し何かそういうものも、その他でもいいのかもしれないけれども、何か書き込めれば書き込んだほうがインパクトがあると思うんです。

あと35分ぐらいございますけれども、あとご自由にどんどん出していただけたらいいと。それでは、ほかにいかがでしょうか。お気づきの点は、どんどん出していただければ。きょうの議論が多分かなりベースになって、これから先、原案づくりが進んでいきますので、いろんなことを出していただいたほうが多分ありがたいんでね。

どうぞ。

○鈴木指導課長 事務局のほうからよろしいですか。先ほど本郷委員のほうから、心に残る教育というお話があって、セカンドのお話があったわけですがけれども、子どもたちの生涯の心に残る教育のあり方はとても大事だと思うんですけれども、具体的にはどんな要素が必要だとお考えでしょうか。抽象的になってしまうと難しいんですけれども、その心に残る教育というあたりで、少し本郷委員のお考えを伺えればと思うんですけれども、いかがでしょうか。

○本郷委員 難しいところですがけれども。何でしょうね。応用がやっぱりきくようにならないといけないし、例えば心の教育と、あと学力的な教育、知的な教育と分けて話すと、まず心の教育のほうでは、今なぜ怒られているのかという理解する、なぜ今怒られているのか、なぜ今これをしなきゃいけないのか、なぜこういうことになっているんだという自分の状況を考えられるような教え方ですよ。だから、頭ごなしにならないようにとか、そんなふうなことを学校でやってほしいのと、あとそれを踏まえた上での家庭の教育を学校側から言ってほしい。言うのは難しいかもしれないですがけれども、一応こういうような対処の方法がありますよと、そういうのかもしれないですね。

結果的に、心に残っていない教育を反面教師としてやっていけばいいと思うので、今、現状どうなっているのかわからないんですけれども、結果として残らないといけない方向にしないといけないというのはあるんじゃないですかね。さすがに、そこまではちょっと私もわからないんです。そういうふうにしてほしいという希望ですよ、あくまでも。

○葉養委員長 今までの話と、ちょっとここ関連するんですがけれども、三、四日前に高知県の土佐町という過疎地に行ってきましたんですよ。小学校6校が1校になってしまっていて、中学校の3校が1校になってしまっていて、小・中併設校、1つだけになってしまったところなんですけれども。ところが、その統合校に行って校長先生とお話ししたら、4月に小・中併設校になったばかりなんですけれども、全国一斉学力調査のB問題というの

が全国より高いんですって、あそこの学校は。土佐町小・中学校という名称なんですけど、土佐小学校というのが土佐市にあって有名校なものだから、「町」というのを間に入れて違うんだというのを示したと言っていました。土佐町小・中学校という併設校ですけども。

だけど、A問題のほうは全国平均とほとんど変わらないというんですね。あの町は地域ぐるみの教育というものにもものすごく熱心なんですね。教育長さんもだから行政出身の方だけれども、社会教育畑をかなり長く歩んできた方で、高知県の社会教育委員会議の副会長をやっているっておっしゃっていましたがけれども。結構、そういうだから学校のつくり方というか、それがその点、A問題、B問題の数字にはね返っているのか、はね返っていないのかという因果関係ははっきりわかりませんが、でもうちの子どもたちというのは不思議なことに、B問題は全国より高いんですよって、だけどA問題のほうは大体全国と同じぐらいだという。だから、武蔵野の場合も東京都の場合も、やっぱりB問題のほうに少し人間関係的な能力を、その調べるようなところに課題があるんですね。日本全国の子どもって、大体そうですね。

だから、そういう視点で言うと、学力をとらえるときに、新しい学習指導要領で活用型学力なんて言っているセカンドスクール構想をうまく使った、デスクワーク的な学力を乗り越えるような学力のとらえ方の中に、セカンドスクール構想をきちんと位置づけていってプログラムをもう一度見詰め直すとか、ただ授業としてやるというのは相当実績あるわけだから、ここの市は。計画の中に、きちんと発展形態が描き出せるという面もあるのかなと思ったんですけども。

何か家庭関係とか、あるいは地域教育という分野は、余り武蔵野というのはNPOもないしとかなんか、そういう話ばかり今まで出ていたんですけども、でも長期計画、調整計画を見ますと、何かいろんな地域の団体があったりとか、これはそうするとうそなんですか。何かすごい元気なまち、地域じゃないかなという感じがするんですけども。教育の領域じゃないんですか、こういうのは。教育の領域に限っては、こういうのが根づかないんですか、広がらないんですか。

- 石代統括指導主事 教育の部分でも、かなり地域の方々が学校に入ってくれています。ただ、横のネットワークというのはなかなか難しい部分も、中学校区ぐらいなのかもしれないけれども、実際にこのような、そんなにも広い市ではないので、非常に地域の方々、あるいは保護者の方々も学校に関して協力的ですし、総合なんかで来ていただくということであれば、積極的に青少協の方を含めてつながってはいると思います。その特色の3でいう地域と協働した教育活動というのは、まさにそのことを言っています、

やはりもっともっと活用して行って、実際には子どもたちのそういった豊かな学びにしていきたいという考えで、ここの構想があります。

○原委員 そのところで最初に気になったのは、4ページの開かれた学校づくり協議会の充実のところの冒頭に、教育活動へ企画段階から参画というふうに書かれているんですけども、これは本当にこういう方向を目指すのでしょうか。開かれた学校づくりの委員さんたちが、教育活動へ企画段階から参画するということを、計画の中で本当にこれは求めていくことなんでしょうか。そういう方向で教育委員会は考えているのかということです。

○磯川委員 学校経営みたいところで……

○石代統括指導主事 1つの柱としては、やっぱり学校運営への参画というものは、基本の1つとして考えています。

○原委員 ごめんなさい。学校運営への参画と、教育活動へ企画段階から参画というのは全然意味が違いますけれども。教育活動への企画段階からということは、では運動会をやるときに、そこからどうやるかということに、企画の中に参加させるということですよ、この表現は。学校運営への参画と意味全然違いますよ、これ。学校の行事、教育活動すべてに、いろんなことをやる中に、企画、今、教員が行事の企画をやっているわけですけども、そこに開かれた学校づくりの委員の方が参画していくということを、きょうここに述べているわけですけども、それ意味が随分違うと私は思っているんですけども、そういうことを目指しているんですかということなんですけれども。

○鈴木指導課長 とても細かい指摘をいただきましたけれども、要するに行事など、一緒に何かするときとはいうことではなくて、例えば学校行事について保護者や地域の方からのアンケート評価のような形で意見をいただく機会がございます。そういう形で意見を学校にいただきながら、それをもとに学校は改善していくというようななかかわりの中での参画ということを、現段階では考えています。原委員が言われるように、運動会をやるときに地域の方も一緒に入って何かということではなくて、そういうような形での参画というんでしょうか、表現が的確ではないかもしれませんが、そんなような参画ということで考えているところです。

○葉養委員長 あと、ちょっとご議論いただきたいのが、磯川さんが大分前におっしゃったのかな、連携の問題ですね。小・中連携とか、あるいは一貫とか、あるいは中・高連携、一貫というのものもあるし、それから小学校の横の連携みたいな動きもちょっとありますよね、中教審で今審議を始めていますけれども。そういう問題はどうか皆さんお考えになるかということと、それともう1つ、ちょっと小学校と中学校というのは本当に同質

的なのか、もちろん学校、両方とも学校なんだけれども、小学校は小学校のやっぱり役割みたいなものがあるのかないのか、私はあるんじゃないかと思っているんですけれども。だから、小学校における教育の何かプリンシパルと、中学校におけるプリンシパルというのは、若干違った要素も出てくるのが自然じゃないかという感じを持つこともあるんですけれども、何かそういう一言で、学校といっても幼稚園も学校なんですよね。幼稚園があつて、小学校があつて、中学校があつて、そういう段階によって違った課題と、それからもちろん共通する面もたくさんあるんですけれども、というのがどういふふうに整理されればいいのかということと、あと連携、ネットワーク化の問題ですね。この2つはどういふふうに委員さんはお考えになりますか、こういう問題は。

校長会は1つですか、ブロックになっているのは。

- 原委員 1つです。小・中、一緒です。
- 葉養委員長 ああ、そうですか。
- 原委員 18校しかありません。
- 葉養委員長 そうすると、やっぱり一緒に何か……
- 原委員 本当の小・中連携をやるのであれば、やっぱり仕事の母体を変えなきゃだめだと思います。出前授業みたいなもので本当にやれるかといったら、やれないと私は思っていますので。要するに、仕事の根っこを。だから、中学校の校長も小学校の校長をやらなきゃいけないだろうし、小学校の教員も中学校の教員をやらなきゃ。やってみて初めて、それも1カ月とか1年とかじゃなくてですね。そういったところに、きちんと3年なり4年なり籍を置いて、初めて両方の学校がわかって、そこからが本当の意味での連携のスタートじゃないかなと私は思っていますけれども。そうしないと、武蔵野では余りありませんが、小学校は何をやっているんだと、あるいは中学校は何をやっているのというようなものが、いつまでも取っ払えないのかなというふうに私は個人的には思っていますけれども。
- 葉養委員長 かなり文化は違うんですよね。小学校と中学校と文化は違って、品川の日野学園とか、ああいうところでは、職員室をどうつくるかということで、まず大きな問題があった。この前、行った、土佐町小・中学校の併設校なんだけれども、校長は1人なんですよね。それで、職員室、どうするかということをいろいろ考えたらしいけれども、一緒なんですよ、1つの職員室に小・中学校の先生が机を並べているんです。主幹が1人、校長ポスト1つ減らした関係で主幹が1人ふえたっておっしゃっていました。あと教頭先生が2人おられるという体制みたいですが。やっぱり教職員組織をどうまとめるかというのは、4月に併設校になったばかりで、まだ時間たっていないせい

もあるんだけど、なかなかこれは文化が違って、研修一つとっても大変ですねなんて言っていました。だから、なかなか、本当に一貫となったら、これは結構大変ですよ、それはね。

とりあえずは、5年のスパンの中では考える必要はないということなんですかね、この問題は、武蔵野の場合は。

何か高校と連携して、ジュニアリーダーなんかの役割を高校生にやってもらうという試みも、結構やっているところがありますよね。高校生が幼稚園に来てくれて、小さい子の相手をしてくれるとか、何かそういう……

○萱場委員 やっています。

○葉養委員長 やっていますか。

だから、そういう何か連携といっても、いろんな側面があるので、副教材を小・中学校でもって全部均等に渡していく、野田市みたいに。無償で小・中学校の副読本をつくっていますけれども、教科書対応の先生の赤本みたいな感じのつくり方ですけども。解答もついていて、それを野田市の小・中学校の1年生から中3まで、全員に無償で教育委員会が配っている。あれも一つの連携といえば連携ですよ。

子どもが日常的にキャンパスを移動して1カ所に集まるというのも連携だし、カリキュラム的な工夫をするのも連携だし、何かいろんな連携というのが考えられています。あるいは電子ボードが今度は、スクール・ニューディール計画で全国に広がりますよね。コンピューターが広がりますね。それで、電子ボードを導入し始めた自治体もあったわけですね。あれもネットワーク化ができますから、コンピューターが内臓されています、黒板に。だから、それをインターネットで接続していると、eラーニングが成り立つんですよ。だから、それも連携ですよ。

だから、いろんな面の連携ということも考えながら、そこまで踏み込むのか踏み込まないのかという、5年という計画の期間から……

○石代統括指導主事 大きな体系の中では、小・中の連携ということも書いてあります。それで、何ができるかということも、だんだんですけれども、中学校区ではやっていただいている、さっき原委員が言われたように、出前授業をやったりだとか、校区で集まって情報交換をして、こんな子が今、中学校に上がったならこんなふうになっているだとか、あるいは、例えば部活動を小学校の子どもたちが参加しに行く機会をつくったりとか、いろいろあると思います。

それで、今後、9年間のこういったカリキュラムをどうするというか、見ていくかどうか、そういった、どんな連携がとれるかというのは、今後、5年間というところの重点

の中には、ここには頭出しはしていませんけれども、教育委員会でも何かしらの仕掛け  
というか、そういったものは研究はしていきたいと思っていますので。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

ほかにどうでしょうか。あと17分ぐらい時間ございますので、もったいないので。  
どうぞ。

○本郷委員 特色3のほうをちょっとお聞きしたいんですけども、今これはあくまでも  
案です。学校支援ネットワークの構築というふうにあります。たしか最初のころ  
に何か資料で、絵をかいた資料で渡されて、コミュニティスクールとか、いろいろ3  
パターンぐらいあった中で、これの学校支援ネットワークで、ここまでにとどめるとか、  
むしろここまでいくとか、そういう何か話し合いはあったんですか。一応、武蔵野市は  
今、現状こういうことをお願いしたいというふうな……

○石代統括指導主事 現在、開かれた学校づくりというのが、学校評議員制度というところ  
で説明が一番最初のころにしたと思います。それで、学校支援地域本部なんていうの  
も、支援ということが中心にあったり、どのパターンが武蔵野市に一番、コミュニテ  
ィスクールも含めて合っているのかというのは、今後まだ検討だと思えますが、やはり  
小・中を合わせても18校ぐらいの、コンパクトな自治体なのでね、その1つが支援の部  
分でいえば、1つの核となるネットワークのもとに、人材の派遣というか支援を各個別  
な学校でやっていたものが、1つの核を中心にできないだろうかという構想はあります。  
そういったのを、その3回目ぐらいまでに3パターンをいろいろお出しして説明をした  
と思うんですけども、武蔵野に一番合った形を構築していけばいいかなというふうに、  
今、本当にまさに検討している状態でございます。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

○本郷委員 読む限りで何か、イメージわかんないですよ。何をやりたいのかというの  
と、どこがやるのかというのと、学校がやらなきゃいけないのか、それとも地域のほう  
で何か団体を立ち上げるのかとか、そういうことなんでしょうね。あと、それとは別に  
また開かれた学校づくり協議会があると。話はまた別なの、支援している側は別に評価  
はしないと。

○石代統括指導主事 開かれた学校づくりの中に、例えばそういった、核となって、例え  
ばコーディネーターみたいな形でやれるものがあれば、それをうまく使っていくとい  
うのも1つの可能性だとは思っています。

○本郷委員 どっちかというとか何か企画から入っていくのであれば、その支援ネットワ  
ークのほうからきた人のほうがいいのかなというのを私はぱっと思って、逆に開かれた学

校づくり協議会のほうが、今、私が知っている限りではうまく機能していないようなことをちょろちょろ聞くんですよね。その中で、さらにここまでやってくださいなんて、多分やる人いなくなってしまうんじゃないかな。その教育活動への企画なんかで、さっき言っていましたけれども、そこまで必要がないのかなとか思ったり、それをするんだったらもっと支援して入っている人たちが、もうちょっとこういう企画ができますよとかいうのであればいいんですけども、協議会の人から企画に入るのはおかしいのかなと。この書き方って、充実って言われたって、では今まで充実していなかったんだなという感じがすし……

○鈴木指導課長 学校支援ネットワークというのは、学校や地域の方、大学や企業が入って、ネットワークを構築しコーディネートができるような役割を担えば、学校からこういうことをやりたいというときに、企画段階から入るような参画の方法もとれるんだと思います。

開かれた学校づくり協議会の充実ということについては、今年度から開かれた学校づくり協議会の中に、学校関係者評価という学校が自己評価したものについての意見を言ってもらいたいというような役割を位置づけまして、多少これまでと違った意味づけを今年度からしてきているわけです。そういう意味で、これまでの開かれた学校づくり協議会の活動をさらに充実できるようにということと、今その中に、代表者会というのを組織しまして、今度は各校にある開かれた学校づくり協議会の代表者のネットワークをつくることで、武蔵野市立小・中学校の広いネットワークを構築していくというようなことも始めてきているところです。

○本郷委員 これ一緒にならないんですか。

○鈴木指導課長 一緒にというのは、開かれた学校づくり協議会と学校支援ネットワークですか。機能的に相互の役割を果たすようになれば、例えば開かれた学校づくり協議会が学校支援ネットワークの核になることも起こり得るわけです。要するに機能を持てるようになれば、それは重なっていくんだと思います。

○本郷委員 支援ネットワークというのは、何か市役所の中にできるんですか、そういうものをつくりたいとかいうのがあるんですか。そういう部署があるとか、そこに何か市民の方とか、地域の方とか、知識を持っている人とか、ALTの人とか来て、そこでまた企画を立てて、もちろん学校側が欲しい企画と、そちら側が何か提供できる企画と。学校がごり押ししてもしょうがないですからね。

○鈴木指導課長 そういうふうになっていくのも1つの方向だと思うんですけども、現段階ではそこまではいっていないですね。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。大分時間が詰まってきましたので、最後に小島先生におまとめいただいて、終わらせていただきたいと。

○小島副委員長 いや、特にありません。

ただ、武蔵野市が目指す子ども像というのが8つ羅列してありますけれども、知・徳・体という大きな枠組みでちょっと整理するとわかりやすいと思うんですね。それだけです。

○葉養委員長 ほかにないでしょうか。なければ、次回の日程に移りますか。

○秋山教育企画課長 それでは、骨子というか章立てで示したところですが、この3点の特色に関して、セカンドスクールはもうちょっと表に出して、今までの実績も含めてその効果を書き込んでいけばいいという意見はいただいたところですが、1つ目の学びの基盤のところ、それから活性化という言葉がいかどうかわかりませんが、知的好奇心を高めるというか、刺激するというのか、ちょっと表現は工夫しますけれども、その2つ目の方向性、それから地域、これはちょっと学校づくり協議会のあり方と支援ネットワークのところはまだ整理していないところもございまして、この3本プラス、セカンドスクールを出すかどうかというところで、よろしいのかどうかの確認をしていただけると、我々としてもこの先を進めるのに、中間まとめを書きやすい、あるいはまだ書けないのか。ただ、時間的にもここをまとめていかないとまずい分もありますので、ちょっとそこをあと5分ぐらいありますけれども、確認いただければありがたいと思います。

○葉養委員長 柱ですね。

○秋山教育企画課長 はい。要するに、特色とありますけれども、重点的に進めていきたいということで3点をお示ししたところなんですけれども。

○葉養委員長 先生というのは、やっぱりこれは外せないんじゃないですかね。先生を育てるというか、先生の職能を大切に、それをさらに促進していくとか、専門性を促進していく体制整備を進めるとか、何かそういう柱というのはやっぱり外せないんじゃないですか。あと教員、学校現場のストレスの問題もありますしね、学校の健康なんていうのが学会でもテーマに取り上げられる時代ですから。心の健康、身体、ウェルネスとか、そういうことも含めて、やっぱり先生というのは、やはりこれは特色の中に外せないんじゃないですかね。何を特色として書けるかということはあるんですけれども、柱としてはちょっとこれは。どうでしょう、外せないんじゃないかなと思います。

○磯川委員 これ簡単な問題じゃないんだと思うんですけれども、要するに今の少子化の中で子どもの数はやっぱり明らかに減っているでしょう。ただし、武蔵野市全体を見た

ときに、非常にふえているところと減っていったところという格差の問題があると思うんですけども、私はやっぱり教育ということを考えるときに、教育というか、学校という組織を考えるときに、やっぱりある程度その人数の問題って、僕はあるんじゃないかという気がするんですよ。それで、必ず序列をつけるということを嫌う人ももちろんいますよね。要するに、みんな子どもたちを平等にという形で。それこそ昔、何か1等賞、2等賞、3等賞って運動会でつけるのも、そのこと自体も反対するような風潮がかつてありましたけれども。やっぱり逆に言うと、子どもたちはそれぞれ自分のポジションをどこで、そういう升の中で自分のポジションを確認する、それは別に優劣という意味じゃなくて、要するに自分というのはこういう形で生きていけるんだみたいなどころ、逆にそこにやっぱり喜びがあるんだみたいなどころを、多分僕はセカンドに子どもたちが感動するというのは、何かそういう時間を持っているんじゃないかなという気がするんですよ。

だから、そういうことからいくと、やっぱり僕はある程度の数というのは、学校という組織の中には必要なんじゃないかなという気がちょっとしているんですよ。これはそう簡単な問題じゃなくてなんですけれども、何となくちょっと余りにも数が少ない、要するに20人そこそこのクラスが2つぐらいしかない、1つの学年にね。というのは、ちょっとやっぱり、ある程度競争、切磋琢磨みたいなどころが、やっぱり教育という面の中で欠かせない要素だと思うと、そういう部分というのは、ある程度考えていかれたほうがいいんじゃないかなという気は多少していますけれども。

○葉養委員長　そこいら辺、質の高い学びの創造というのがあるから、ここら辺で言及するという手もありますよね。別の面からそういう問題がクローズアップされる可能性もないわけじゃないんですよ。何か世の中の動きとしては、機関補助という形態が、だんだんだんだん後退する動きがあるんですよ。今まではだから子どもの数比でお金が出て流れているわけじゃなくて、学校単位で流れる機関補助という、義務教育の機関補助になっているんですけども、だんだんパーヘッドになってきています。子ども1人当たり何ぼという形に切りかえるべきだという論調はかなりあるんですよ。それがだから教育バウチャーの問題なんです。文部科学省にも、やっぱり検討組織だけは立ち上げなきゃいけないものだから、首相官邸のほうから、あるいは産業界から相当のプレッシャーがありますので、それで私もちょっと財務課に頼まれて委員になってはいるので。そんなにやっていないですけども、文部科学省はどちらかといえば余り乗り気じゃないから、ただ首相官邸がやっぱりそれを言っていますのでね、政権が交代したらどうなるかわかりませんが、何か世の中の雰囲気としてあることは事実なんです。だか

ら、その財政面で締めつけが進行していると、もしだから学校をそれだけ残すのであれば、自前でかぶれという話になっていったりする時代がやってくると、多分、いや応なしに学校数の削減が進行していくということが出てこないとは限らない。

それと、磯川さんおっしゃったように、やっぱり教育論の問題というのはありますよね、確かにね。教育論としてどう考えるか。そこいら辺、非常に微妙な、地域紛争がよく起こりますから、この問題は。書き込みはすごく、注意深くなきゃいけないとは思いますがけれども、長期的なビジョンという流れの中からすると、やっぱり避けて通れない問題になる可能性はないとはいえないって。どうやって書き込むのかということはありませんけれども。そこも、ではちょっと検討していただくということ。

ほかに。

- 小山田委員 その柱のほうにいつてしまうよりは、やっぱり多少時間かかっても、武蔵野が最終的に今求めようとしている、どんな子どもを育てたいんだというのが出てくれば、自然に学校教育の質、中身としては、そこに体験だとか、言語とか表現を大事にした教育の質みたいな、セカンドスクールもそこに入ってくる。そのためには学校だけでは無理で、学校と地域の連携なしにはできない。そして、その根底を支える教育環境みたいな中に、教員の質だとか、今特別支援で一人ひとりのニーズに応じた教育、そういうのをどう進めるかとか、不登校問題どうするかみたいな、そういったようなことの大きな柱が見えてくると思うんですが、まずはどういう教育をしてどういう子どもを育てようとしているかというのがあれば、それに応じて、例えば基礎・基本が身についた子どもであれば、やっぱり教育の質ではこう、家庭と地域ではこう、環境ではこういうことをやっていかなきゃいけない、それに応じて出てくると思うんですよね。そのへんのところが見えないと、何か私たちが何を、何のためにそれを言っているのかというのが、何かちょっと言いにくいんですよね、流れとして。これ、あと2回、中間まとめについての協議ができるんでしょうか。
- 秋山教育企画課長 予定では、きょうの章立てというか骨子を受け、なおかつ最初に特色みたいな形で出させていただいたんですけれども、同時にきょう目指す子どもたちというのが、結論が出たとして、次回が文章をつくって、それを確認していただいて、あと2回目で確定という形にしたいところです。なので、中間まとめの案と並行してもう1回、目指す子どもの姿というところを、議論いただき、あと2回で確定していきたいところが事務局の考えでございます。
- 葉養委員長 大分きょうはいろんな角度からご議論いただきましたので、それをベースにして、また次回までに原案を事務局のほうでつくっていただいて、事前にお送りいた

だいたいで、次回ある程度、方向が決まる形の議論ができればということだろうと思います。

よろしゅうございますでしょうか、そういうことで。

では、次回以降の日程につきましては、これで……

○秋山教育企画課長 次回、8月は決まっております、8月25日の火曜日、時間帯は同じで7時からで、部屋はこちらと同じ811の会議室になりますので、お願いします。9月以降に関しては、10月は中間まとめを公表する予定なので10月は抜けますけれども、あと4回の日程に関しては、後日で結構ですので、ファックスあるいは教育企画課のほうにご連絡いただいて、決まった時点で皆様に日程のお知らせをしたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

○葉養委員長 それでは、長い時間、どうも活発にご議論いただきありがとうございます。またよろしく願いいたします。

どうもご苦労さまでした。

午後 8時59分閉会